



# 教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana,  
Città del Vaticanoの転載許可済  
© 1992 発行所  
財団法人 精道教育促進協会  
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6  
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

## すべての人は

### 聖性に召されている

「私たち自身の使徒的権威にもとづき、尊者・司祭ホセマリア・エスクリバー(オプス・デイ創立者)およびカノッサ修道女会のシスター、ジョセフィーナ・バキータを、これより福者と呼ぶことを宣言する。(…)御父と御子と聖霊の御名によつて。」この言葉をもつて、教皇ヨハネ・パウロ二世は五月十七日(日曜日)ローマの聖ペトロ広場にて、ホセマリア・エスクリバー師およびシスター・ジョセフィーナ・バキータをおごそかに福者の位に上げられた。

群衆が歓呼して教皇様の宣言を迎え、アーメンを三唱すると、二人の福者の肖像画の被いが取り払われた。

(ことばの典礼は復活節第五主日の典礼から取られた。福音書の後、教皇様はイタリア語とスペイン語で以下のお話をされた。)

#### 1 「多くの苦しみを経て神の国に入らねばならぬ。」

使徒録十四・二二  
エンマウスに向かう道で、イエズスは二人の弟子に仰せになりました。「キリストはこれらの苦難を受けて栄光に入るはずではなかったか。」(ルカ二四・二六)

さらに本日の第一朗読で、使徒パウロとバルナバが「弟子たちの心を強め、信仰にとどまるようにと勧めた」(使徒十四・二二)ことを聞きました。彼らはエンマウスへの道でイエズスが言われたのと同じ真理、主の御生涯と死によつて確認された真理、すなわち「多くの苦しみを経て神の国に入らねばならぬ」という真理を宣言しました。

十字架に付けられ、上げられたキリストの弟子たちは、時代を越え、世代から世代へと続いて、主

#### 2 今日、私たちは再びこの救いの道(聖性への道)を見つめる機会を得て、今から「福者」と呼ばれるこの二人の人物の姿に注目します。司祭ホセマリア・エスクリバー、そしてカノッサ修道女会のシスター、ジョセフィーナ・バキータです。

教会の願いはキリストの全真理に仕えること、真理を公に告げることです。教会は贖い主の秘義全体に仕えることを念願としています。神の国に至る道には多くの苦難がありますが、その先にはキリストの復活によつて示された栄光が待っています。

その栄光がどのようなものなのかは、靈感に満ちたヨハネ黙示録の告げる新しいエルサレムの姿に示されています。「人とともにある神の幕屋がこれである。人は神の民となり、人とともにある神である主」は人の神となられる。」(黙示録二一・三)

「見よ、私はすべてを新たにす

る」(黙示二一・五)と、栄光の主は言われます。この最終的な「新しい世界」への道は、この地上に始まり、「新しい筈」すなわち「私があなたたちを愛したように、あなたたちも互いに愛し合え」(ヨハネ十三・三四)に従うことを求めています。今日、復活の喜びのうちには福者の位を受ける二人は、この新しい筈を生活の中心とした、模範的な教会の一員でした。

#### 3 信仰篤いキリスト信者の家庭に生れたホセマリアは、早くも青年時代に、より深い献身の生活へと招く神の呼びかけに気づきました。司祭となつて数年の後、彼は創立者としての使命に着手し、四十七年間にわたり献身的な愛と賢明さをもつて、今日のブレラトゥーラ(属人区)・オプス・デイの聖職者と信徒の世話を続けてきました。

福者となつたこの人物の霊的・使徒的生活は、信仰を通して、キリストにおける神の子である自分自身を知ることに基づいていました。この信仰は、彼のうちに主への愛と福音宣教への熱意、克服しなげればならなかった大きな試練や困難の数々の最中であつてさえ保ち続けた絶え間ない喜びを育みました。「十字架を担うとは、幸せと喜びを見つめること、十字架を担うとは、キリストと一致すること、キリストになること、すなわち神の子となることである」と述べています。

超自然的直観をもつて、福者ホ

セマリアは倦まずたゆまず万人が聖性と使徒職に召されていることを説き続けました。キリストは、全ての人が日々の現実の中で聖人となるようお望みなのです。従つて、イエズス・キリストに一致して生きるなら、仕事もまた、個人的な聖性と使徒職のための手段となります。なぜなら神の御子キリストは、託身において、何らかのかたちで人間と被造物のあらゆる現実を御自身に結び付けられたからです。(Dominum vivificant, 50番参照) 物欲が野放しになった社会では、モノが偶像となつて人の心を神から引き離していますが、福者ホセマリアは、まさに神と人間の努力が作りだしたこれらの現実が、創造主の栄光と兄弟姉妹たちへの奉仕のために正しく用いられるなら、全ての男女がキリストと出会うための道となることを教えてくれました。「この世のあらゆるものを、地上でのほかない人間の活動をも含めて、神へと向かわせなければならぬ。」(書簡、一九五四・三・十九)

「我が主、我が神よ、永遠に御身をたたえます。」 答唱詩篇で歌つたこの一節は、さながら福者ホセマリアの霊的生活の要約とも言えそうです。彼をとりこにしたキリストへの大いなる愛は、キリストのために生涯を捧げ、その受難と復活の秘義にあずかるよう、ホセマリアを駆り立てました。同じように、聖母マリアへの子としての愛に動かされて彼は、聖母の

徳にならいました。「永遠に御名をたたえます。」この賛歌は福者の心から自然にわきおこり、彼自身と彼の周りのものすべてを神に捧げさせたのです。実に、彼の生涯を特徴づけているのは、キリスト教的ヒューマニズムと紛れもない善良さ、心の柔和、神に選ばれたものを清め、聖化する隠れた苦しみでありました。

**4** 福音に深く根ざしたこの霊的メッセージの今日性と超越性は明らかです。それは神がホセマリアの生涯と業績を祝福し、実り多いものとされたことから明らかです。福音宣教活動に新しい使徒職の分野を開いたこの模範的な司祭は、生国スペインの誉れです。この喜びの祝典が、ブレラトウーラ(属人区)・オプス・デ

イの全メンバーのより深い献身への良い機会となりますように。聖性と、教会生活への惜しみない参加への呼びかけに応じ、つねに真実の福音的価値観の証人となつてください。特に最も貧しい人、困窮している人々への心遣いをもって、力強い使徒的熱意を発揮してください。

**5** 福者ジョセフィーナ・バキータにも、父のような神の愛と、至福八端の教えの、変らぬ現代性をはつきりと見出すことができます。スーダンに生れ、一八六九年、まだ子供の頃、奴隷商人にさらわれてアフリカ各地の市場で売られ、奴隷制度の非道さを経験しました。人間の残虐性は彼女

の体に深い傷跡を残しましたが、こうした体験にも拘わらず、無垢で希望にあふれていたのです。「奴隷時代にも絶望したことはありません。」と彼女は口にしていました。「心の中に不思議な力を感じ、それが私を支えてくれました。」バキータという名は、奴隷商人のつけた呼び名ですが、幸運という意味です。そのように、彼女はいつも自分を支え、共にいてくださる神のあらゆる助けに感謝していました。

神の摂理の神秘なからいで、ベニスに着いたバキータは、間もなく恩寵に心を開きます。洗礼を受け、彼女を引き取り教育を与えたカノッサ修道女会のシスターの間で数年間の形成を受けた後、当然の結果として福音の宝に目覚めたバキータは、自由の身で故郷に戻り、主に全てを捧げる決心をします。

カノッサのマグダレーナのように、自分も神のみのために生きたいと望み、英雄的とも言える固い決意に謙遜と信頼を添えて、より高い愛へと通じる忠誠の道を歩み始めたのです。彼女の信仰は強く、明



快で、熱意にあふれていました。「神を知ることがどんなに喜ばしいことか、おわかりになれたなら！」と。

**6** カノッサ修道女会のシスターとして、福者バキータは日々を従順のうちに送り、謙遜で世に隠れながらも、真の慈悲と祈りに満ちて五一年の歳月を過しました。彼女が生涯の大部分を送ったシオの人々は、程なく「マードレ・モレッタ」

(バキータの呼び名の自己を惜しまぬ豊かな人間の資質と、人を引きつける並外れた内的力に気づきました。彼女の生涯は、福音宣教のための絶えざる祈りと、謙遜で英雄的な慈善事業への献身のうちに過ぎ、こうして彼女は神の子の自由を

味わい、それを周囲の人々にも広げることができました。現代、歯止めもない力・金・快楽の追求が深刻な不信と暴力と孤独を生み出していますが、この時代に主は再びシスター・バキータの姿を示し、本当の幸福の鍵は至福八端にあることを、彼女に語りせておられます。

ここに、天の御父を模範とした英雄的善良さのメッセージがあります。シスター・バキータは福音に基く和解と赦しを証明し、長年の紛争に苦しみ多くの犠牲者を出した故国スーダンのキリスト信者たちに確かな慰めをもたらしました。彼らの忠実と希望は全教会の誇りと感謝の源です。この大きな試験のときに、シスター・バキータは先頭に立ってキリストにならい、信者としての生活と教会への揺るがぬ愛を深めるよう、人々を励ましています。今、もう一度、スーダンの運命を左右する人々に向かつて心からお願いを申し上げます。みなさんの標榜する平和の理想を実行に移し、基本的人権を尊重していただきたい。そして何よりも信教の自由が、民族や人種の別なく全ての人に保証されるようお願いしたい。

深刻な問題となっているのは、戦火に追われ、家や仕事を捨ててきた南からの何十万という難民の状態です。最近になって、それまで少なくとも何らかの援助を受けていたキャンプ地から追われ、砂漠地帯へと運ばれて、国際機関からの救援物資の輸送も妨げられています。悲しむべきことです。平静ではいられません。

私は、国際福祉機関の方々が、必要な援助を時をおかず送り続けてくださることを強く要望いたします。この式典に参列しておられるスーダンの教会代表団の皆さんに御挨拶申し上げます。

摺り上げます。私の思いは愛と祈りと共に、スーダンの全教会へと向かいます。司教方、教区司祭、宣教師、司牧に携わる人々も含めて信徒の皆さん。そして要理教育者の方々。真理と神の御言葉と愛を広める上でなくてはならない、寛大な協力者たちです。

**7** 「私は新しいおきてを与えらる。あなたたちは互いに愛し合え。私があなたたちを愛したように、あなたたちも互いに愛し合え。それによって、人はみな、あなたが私の弟子であることを認めるだろう。」(ヨハネ十三・三四・三五) イエズスのこの言葉をもって今日のミサの福音朗読は終わります。この言葉の中に、聖性とは何であるかが要約されています。それはホセマリア・エスクリバーとジョセフィーナ・バキータが到達した聖性、それぞれ別の道をたどりながらも、最後に同じゴールに到着した一人の聖性です。二人とも心を尽くし、全力を上げて神を愛し、兄弟姉妹への奉仕を通じて英雄的に愛のわざを証しました。それゆえ教会は今日、この二人を栄誉の座につかせ、「私たちが愛し、そのためにご自身を渡された」(ガラタイア二・二〇参照) キリストにならうための模範としてかかげるのです。(…)

「私は新しいおきてを与えらる。あなたたちは互いに愛し合え。私があなたたちを愛したように、あなたたちも互いに愛し合え。それによって、人はみな、あなたが私の弟子であることを認めるだろう。」(ヨハネ十三・三四・三五) イエズスのこの言葉をもって今日のミサの福音朗読は終わります。この言葉の中に、聖性とは何であるかが要約されています。それはホセマリア・エスクリバーとジョセフィーナ・バキータが到達した聖性、それぞれ別の道をたどりながらも、最後に同じゴールに到着した一人の聖性です。二人とも心を尽くし、全力を上げて神を愛し、兄弟姉妹への奉仕を通じて英雄的に愛のわざを証しました。それゆえ教会は今日、この二人を栄誉の座につかせ、「私たちが愛し、そのためにご自身を渡された」(ガラタイア二・二〇参照) キリストにならうための模範としてかかげるのです。(…)

※カテケージス・シリーズ別売のお知らせ※ 「教皇様の声」に掲載されたカテケージスのコピー版を別売しております。新たにシリーズ(3)「贖いと罪」「聖霊」：九七頁、一〇〇〇円(送料共)が加わりましたので、シリーズ(1)「創造」「信仰と神」「天使の創造」「神の摂理」：九二頁、一〇〇〇円(送料共)と合わせてご利用下さい。シリーズ(2)「イエズス・キリスト・真の人、真の神」：一〇八頁、二二〇〇円(送料共)ご希望の方は、精道教育促進協会まで。

「神を知ることを、おわかりになれたなら！」と。

ここに、天の御父を模範とした英雄的善良さのメッセージがあります。シスター・バキータは福音に基く和解と赦しを証明し、長年の紛争に苦しみ多くの犠牲者を出した故国スーダンのキリスト信者たちに確かな慰めをもたらしました。彼らの忠実と希望は全教会の誇りと感謝の源です。この大きな試験のときに、シスター・バキータは先頭に立ってキリストにならい、信者としての生活と教会への揺るがぬ愛を深めるよう、人々を励ましています。今、もう一度、スーダンの運命を左右する人々に向かつて心からお願いを申し上げます。みなさんの標榜する平和の理想を実行に移し、基本的人権を尊重していただきたい。そして何よりも信教の自由が、民族や人種の別なく全ての人に保証されるようお願いしたい。

深刻な問題となっているのは、戦火に追われ、家や仕事を捨ててきた南からの何十万という難民の状態です。最近になって、それまで少なくとも何らかの援助を受けていたキャンプ地から追われ、砂漠地帯へと運ばれて、国際機関からの救援物資の輸送も妨げられています。悲しむべきことです。平静ではいられません。

私は、国際福祉機関の方々が、必要な援助を時をおかず送り続けてくださることを強く要望いたします。この式典に参列しておられるスーダンの教会代表団の皆さんに御挨拶申し上げます。



# 説教・講話・書簡等の抄訳

※福者ホセマリアの精神と生き方をもっとくわしく知りたいという方に、お勧めします。  
「ホセマリア・エスクリバー」(オプス・デイ創立者小伝) サルバドル・ベルナル著 精道教育促進協会スタッフ訳 定価一八五四円 千三〇〇円

アメリカ大陸福音宣教五百年を記念して、アメリカ各地の巡礼地を訪ねる私たちの霊的巡礼の今回の目的地は、コロンビアのカルタヘナ・デ・インディアスです。ここで聖ペドロ・クラベルの聖堂に足をとどめ、黙想と祈りを捧げたいと思います。

## アメリカ巡礼 聖ペドロ・クラベル

スペイン人のイエズス会宣教師であった聖人は、教会がカリブ沿岸に広がった初期の時代、アメリカで最も英雄的な福音宣教師でした。黒人奴隷の使徒として、歴史に名をとどめています。グラナダ新王国(現在のコロンビア)に派遣されたとき、彼は一介の神学生にすぎませんでしたが、学業をおえた彼は、カルタヘナで司祭の叙階を受け、アフリカから来た奴隷たちの司牧のため四〇年にわたって身を捧げ、限らない愛をもって奴隷たちを助け、保護し、福音を広めたのでした。聖人は三十万人もの黒人に洗礼を授けましたが、それは人間としての尊厳を無視され、無慈悲にも新大陸に放り出された人々でした。

コロンビアへの使徒的訪問の際、私は聖人の墓に詣でる幸いを得ました。その機会に、普遍教会の牧者として黒人奴隷の使徒と声を合わせ、今日多くの男女を苦しめているあらゆる現代版奴隷制度から犠牲者たちを守りたいと願いました。

アメリカ大陸各地に住むアメリカ出身の全てのアメリカ人のために、聖ペドロ・クラベルが霊的・物質的な恵みを豊かに獲得してくださいませように。神のご計画に従い、個人的にも、また社会の中でも完全な人間の発達をとげることができませうように。教会が彼らのことを心にとめてい

彼らの状態はサント・ドミンゴの会議に集まる司教方の特別な司教上の関心の的となるのです。今この時、私はこの人々に心から挨拶いたします。この十月にラテン・アメリカを訪問して、お目にかかれるのが楽しみです。聖マリア、主のはしたため、最初の、そして新たな福音宣教の星、愛すべきアメリカの人々をご保護のもとにおき、祝福をお与えください。(九二・二・九)

## たとえで啓示される 教会の成長

### 教会シリーズ5

(神の国の成長は神の御働きですが、また福音の説教を聞いた人たちの受容性と自由意志にも依るのです。)

1 前回のカテケジスで申し上げたように、教会の起源を理解するためには、どうしてもイエズスが行い、また教えられたすべてのことを考慮しなければなりません。(使徒行録一・一参照)

2 「神の国は土地に種をまいた人のようである。日夜起き伏しするうちに、気づかぬままに種は生えて育つ。土地は自然に実を結び、はじめは苗、それから穂、それから穂の中に豊かな実が実る。実ると鎌を入れる。取り入れの時が来たからである。」(マルコ四・二六―二九) さて、神の国はこの地上で、人間の歴史の中で成長しますが、それは最初の種、すなわち神ご自身の神秘的な御働きに

始まり、この教会が何世紀にもわたって育て上げてきたものです。御国を目指す神の活動には、犠牲の(鎌)も存在します。つまり、御国の発展は苦しみ無しにはありえません。これが、マルコ福音書に記録されているたとえの意味です。

3 同じ考えが他のたとえに、特にマルコ福音書に集められているたとえの中にあります。(十三・三一―五〇)  
「天の国は、人が畑にまいた一粒の芥子だねのようである。それはどの種よりも小さいが、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来てその枝に宿るほどの木にさえもなる。」(マテオ十三・三一―三三) これは御国の広い意味での成長です。

4 種まきと種のとえでは、神の国の成長は、確かに種まく人の働きの結果と見られますが、種は土壌と天候状態に比例

して、収穫をもたらします。「あるいは百倍、あるいは六十倍、あるいは三十倍もの。」(同上三・八) 土壌は人的受容性を意味します。そこで、イエズスによると、神の国の成長は人間によっても条件づけられることになりました。人の自由意志がこの成長に責任がある、ということなのです。それでイエズスは皆に「御国の来たらんことを」と祈るよう、お勧めになります。

5 神の国の地上での成長について語るイエズスのたとえの一つは「麦の中に毒麦をまいて立ち去った」敵の存在とその行為によって生じ、御国にも避けられない抗争のタイプをたいへん現実的な姿で啓示しています。イエズスは言われます。「芽が生え出て実ると、毒麦も現れた。」下男たちがあれを抜きに行きましようか、と言うと、主人はそうさせません。「いや、毒麦を抜き集めようとして、よい麦も共に抜く恐れがある。双方とも収穫の時まで育つにまかせておけ。収穫の時、私は刈る人に、まず毒麦を抜き集めて焼き払うために束ね、麦を集めて倉に納めよ、と言おう。」(マテオ十三・二四―三〇) このたとえはこの世で、私たちの生活の中で、実に教会の歴史の中でも、善と悪とが共存し、しばしば混在していることを説明しています。イエズスが私たちにお教えになるのは、こういう事象を見るときにキリスト教的な現実主義で見る

# 不変の教え

こと、あらゆる問題は明快な原則で処理しなければならぬが、また賢慮と忍耐とで当らなければならぬ、ということですが、そのためには、歴史を超越的な見方でとらえる必要があります。全ては神のもの、何事も神の摂理のままになるのですから。しかし、善人と悪人との最後の運命は、その終末論的な局面で明らかです。その象徴が麦を集めて倉に納め、毒麦を焼き払うことです。

**6** イエズスは弟子たちが種々のたえを弟子たちの求めに応じ、説明されます。(マテオ十三・三六―四三参照) 神の国の時間的な局面と終末論的な局面が、二つともイエズスの言葉に表れています。

イエズスは弟子たちに仰せになりました。「あなたたちには神の国の奥義が授けられた。(マルコ四・十一参照) イエズスは弟子たちにこの奥義をお教えになると共に、言葉と行いによって、御父がイエズスのために王国を備えられたように、ご自分もまた弟子たちのために王国を備えられたのです。(ルカ二二・二九参照) この天国の授与は、イエズスご復活の後も再び取り上げられました。使徒行録によれば「四十日の間彼らに現れて、神の国のことについて話された。」(使徒一・三参照)

これは「天に上げられ、神の右に座したもうた(マルコ十六・十九)その日まで続きます。それは、教

会の誕生に当って神の国が具体的に始まるために、ご昇天と聖霊降臨のあと何をすべきかを使徒たちにお示しになった最後のご指示と配慮でありました。

**7** フィリッポのカイザリア地方でペトロに言われた言葉もまた、御国についてのイエズスの説教の文脈の中にあると言えます。イエズスはペトロに、あなたはペトロである、私はこの岩の上に私の教会を立てよう、と言われたそのすぐあとで「私はあなたに天の国の鍵を与える(マテオ十六・十九)」と仰せになりました。「地獄の門」もこれに勝てないだろう(マテオ十六・十九参照)と。これは一つの約束で、その時の表現は「立てよう」と未来形になっています。と言うのも、この世での

神の国の決定的創設は、十字架の犠牲と復活の勝利によって成し遂げられるはずのものだからです。後日、ペトロも他の弟子たちも、「やみから輝かしい光にあなたたちを呼ばれた御方の不思議をあらわすために選ばれた(一ペトロ二・九)自分たちの召命を深く自覚することでしょう。同時に、彼ら全員が種まく人のたとえに表されている真理を悟るようになるでしょう。すなわち「植える者も水を注ぐ者も取るに足りない。ただ尊いのは成長させてくださる神である」とパウロが後に書き記すように。(一コリント三・七)

**8** 黙示録の著者も御国についての同じ認識を示すのに、神の小羊に向かって歌われる歌を引用しています。「あなたはほふられ、その血によって、すべての部族とことばと民と民族の者たちを神のためにあがなわれたからである。私たちの神のために、あなたは彼らを地上をつかさどる司祭の王国の民とされた。」(黙示録五・九―十) 使徒ペトロは「イエズス・キリストによって神に嘉される霊のいけにえをささげる」ために、使徒たちは任命されたのであると説明します。(一ペトロ二・五) これらはすべて、イエズスが教えられた真理を表しています。種まく人と種のたとえ、麦と毒麦の成長のたとえ、芥子だねの時から大きな木になるたとえで神の国について語り、その国は聖霊の御働きのもとに、イエズスの死と復活のもたらす活力付与の力によって、霊魂の中に成長し、

神ご自身の予見し給う時まで成長し続ける王国であります。**9** 聖パウロは宣言します。「そして終りが来る。その時キリストは全ての権勢、能力、権力を倒し、父なる神に国を渡される。」(一コリント十五・二四) 「すべてのものがその下に置かれるとき、子自らも、すべてを自分の下に置いた御方に服従するであろう。それは神がすべてにおいてすべてとなるためである。」(一コリント十五・二八)

教会は、始まりから終りまで、神の国についてのこのすばらしい終末論的展望のうちに位置しています。ここでこそ、教会の歴史は、最初の日から最後の日まで展開するのである。

## 黙想の葉



イエズス・キリスト

神の御子が人となられたのは、地上における人間の存在のあらゆる面を称揚することによって、永遠の真理、つまり、人類に関する神の真理を再確認するためです。

君たち一人一人に言いたい。「私について来なさい」と招くキリストの呼びかけに注目せよと。主は私の道を歩め、私のかたわらに立

て、私の愛にとどまれ、と仰せになる。選ぶべき道が与えられている。キリストとその生き方、主の愛の掟を君たちは選ぶことができるのだ。

諸徳

新聞にも取り上げられず、人に知られることもないが、剛毅は、いたるところでしばしば英雄的な行いに発揮されている。それに気づくのは、人間の良心、そして神

だけ。こうした勇氣ある行いをする無名の人々全てに、私は賞賛の言葉をささげたい。

正義への餓えや、真理と世界の道徳的秩序のために戦うことが急を要するとはいえ、それが憎しみに変わったり、憎しみを引き起す根源になったりしてはいけません。

教師、指導者に

大勢の人が信仰の真理を受け入れなくても、辛抱強く慈しみをもって対話を重ねれば、霊的・宗教的価値を理解させることができますし、また、そうしなければなりません。

母性の値打ち

母であること、それは人間的な面から見て偉大なこと、輝かしいこと、根本的に大切なことです。

この輝かしく尊い召し出しが、新しい世代の人々の心の中で、大切にされるようあらゆる手をうたねばなりません。私たちが生きる家庭、社会、文明の中で、法律、仕事、出版、生活文化、教育、学問の分野で、女性として母親としての権威が軽んじられることのないように。どの分野においても、例外なく、これこそ最も根本的な基準だからです。

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円  
送料実費 一年予約九百円 送料六百円 二十部以上の一括購入な

郵便振替 神戸 72393